

近江聖人

中江藤樹先生を奉ずる、藤樹書院の皆様を
姫路にお迎えして

亀山雲平の足跡をたどる

平成14年6月22日（土）

於、姫路市白浜町・松原八幡神社・姫路市市民センター



案内者、播磨聖人 亀山雲平顕彰会

近江聖人

中江藤樹先生を奉ずる、藤樹書院の皆様を
姫路にお迎えして

亀山雲平の足跡をたどる

平成14年6月22日（土）

遊

於、姫路市白浜町・松原八幡神社・姫路市市民センター

案内者、播磨聖人 亀山雲平顕彰会



龜山雲平

43才元治元、1864



2

播磨聖人 龜山雲平翁

没後 百年祭記念

平成12年5月6日

御辭令
印



龜山雲平

縣社祭神社司

龜山雲平

義補姫路市本町縣土射楯
兵主神社姫路神社社司

社祠宣申

付候事



明治二十一年十一月一日

飾磨縣

明治二十一年

御辭令書
(2枚)



碑 蹤 遺 生 先 山 龜 宇 節
(行舉式都除日六月七年四正大)



像 肖 生 先 山 龜 宇 節

觀海講堂而

丁巳年夏月
王之春畫

觀海講堂

節字龜山先生遺蹟之碑

帝室博物館總裁從仁位勲一等股野琢篆

山水の盡淑なる、偉人を出ださんば則ち偉人を住む。蓋し人と山水とは相得るなり。故に鶴東の山紫水明には石川丈山焉に住み、王侯に事へずして其の事に高尚す。琵琶湖の紐波遙翠、中江藤樹焉に居し徳行人を化す。人称して近江聖人と曰ふ。播磨節字先生の若きは亦其の人なるか。

先生、諱は美和、字は由之、節字と号す。龜山氏は姫路藩の世臣なり。嘉永中昌平齋に遊び洛闈の学を修するも必ずしも拘はれず。業成りて藩に帰り、侍読より大監察に陞る。食祿百七十石。時に幕末騒擾に際し、先生鞠躬尽瘁、藩政を輔翼して功少なからず。既にして明治維新。志を仕途に絶ち、松原神社の祠官と為り、傍ら觀海講堂を開き後進に教授す。遠近來たり学ぶ者甚だ衆し。

先生、天資孝友恭謙なり。愛す可くして侮る可からず。其の教えは徳行を以て率先す。白砂青松一帯を掩映し烟波を隔てて島嶼を望み、帆船汽船其の間に往来す。漁唱響き沙鷗翔り宛ら絵画の如し。

先生、業暇には冠童を培养し、逍遙詠詠して以て樂しむ。居ること殆ど三十年、七十八歳を以て病没す。其の履歴及び世系妻子の若きは瑞松山の墓碑銘之を詳かにすれば今復た贅せず。

烏乎先生、志を仕途に絶ち其の事に高尚し、又徳行を以て人を化す。人、聖人と称す。而して其の人と山水と相得ること此の如し。近時の丈山藤樹と謂ふ可し。頃者門人追慕して已まず、胥謀りて碑を樹て、以て其の遺蹟を不朽にせんと欲し、遠く余の銘を招む。銘して曰く、

節は青松と堅く、心は白砂と潔し。自ら徳を修むるに非すんば師を念ふこと切ならず。晨に遺模を奉じ夕に遺規を守る。千古万古其の人死せず。

從三位勲二等文學博士 三島毅 撰す 時に齡八十五

大正三年十一月 梧窓 湯川亨 謹書

訓注

盡淑——神妙不可思議なこと。 相得る——持ちつ持たれつの関係。

鶴東——鶴川の東、山紫水明の地。高尚す 世俗を離れ高雅な暮らしをする。

琵琶湖——琵琶湖の湖面のさざ波遠くの翠の山波。 化す 感化する。教化する。

世臣——代々の臣。譜代の家来。

洛闈の学——程朱の学。朱子学。

鞠躬尽瘁——全力を尽くす

仕途に絶つ——宮仕えを辞する。

輔翼す——輔佐する。助ける。

漁唱——漁をする歌声

携帶冠童——若者や子供たちを伴ない。

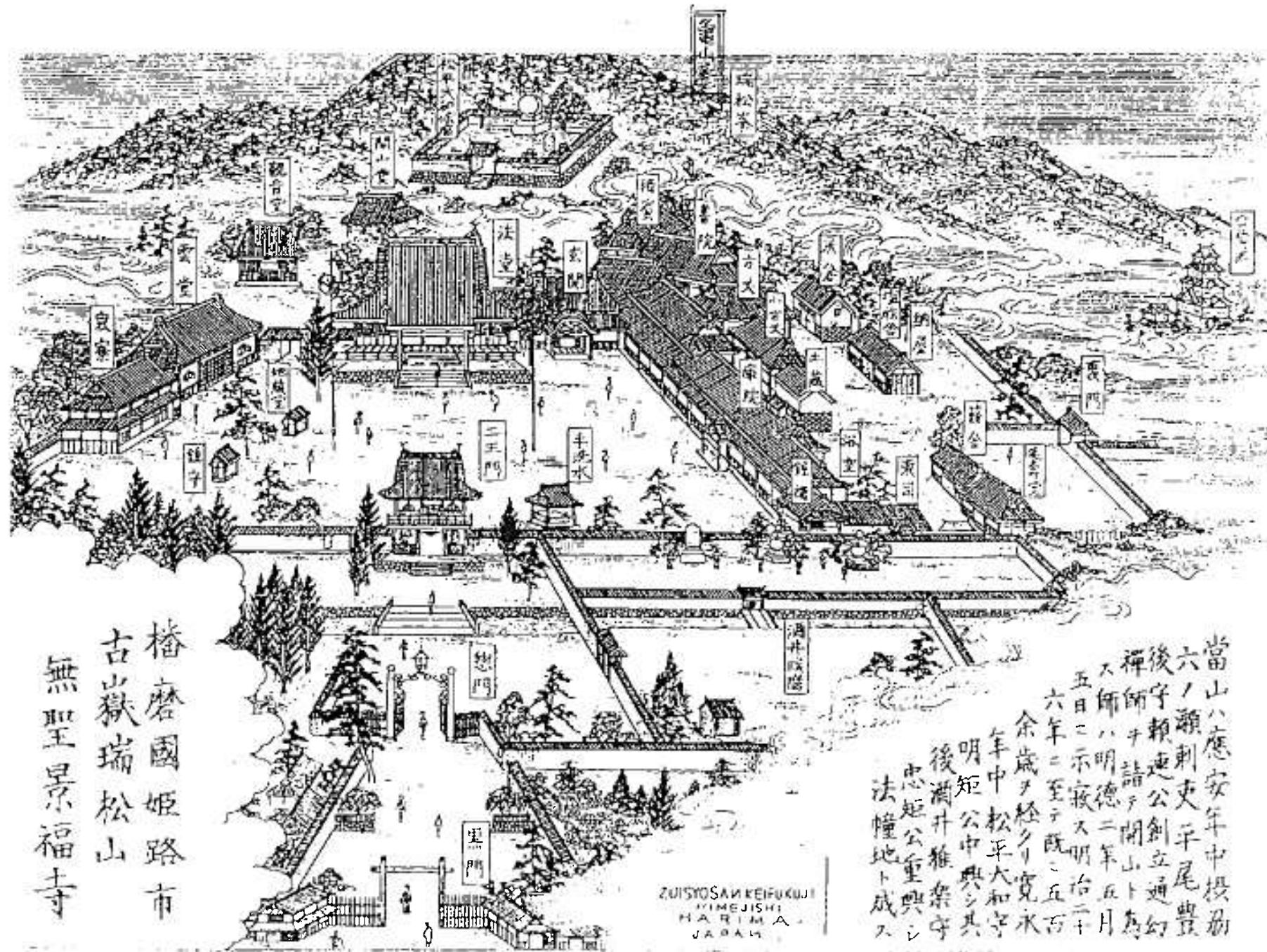
遺模遺規——遺されたきまりや教え、戒め。



82 83 84 85

亀山雲平の菩提寺

景福寺



龜山雲平先生之墓所



補土史研究（紫福寺・龜山雪平翁墓所を訪ねて） 平成十三年4月29日

節宇龜山先生墓碑銘

國家日に開明に赴き、人情戸に輕々に流る。而して這處の君子吾が節宇翁の若きは世未だ多く其の比を見ざるなり。翁、諱は美和、字は由之、敬佐又は源五右衛門と称し、後雲平に改む。節宇は其の号なり。

龜山氏は姫路藩の世臣なり。父諱は百之、実は福田繁舜の第二子なり。來りて龜山成将の後を嗣ぎ其の女を妻とす。翁は其の第二子なり。十歳にして父を喪ひ兄の剛毅と母に事へて孝養極めて至る。十八歳にして藩学の授読に擢んでらる。剛毅歿し翁後を承く。嘉永四年藩命を以て江戸昌平塾に学び詩文係為り。尋きて藩主緯光公近く。翁置に在りて日に礼服を穿き危坐して喪を終ふ。

居ること二年、帰りて顯徳公の侍読為り。公励精して治を圖り政績較著なり。翁啓沃の功居多し。閑亭公封を襲ぐに及び、大監察兼教授に擢んでらる。翁清廉率先、一藩の風俗漸く改まる。俸を増して百七十石に至る。此の時に当たり國家多難、公大老職に陞る。翁藩に在りて政を輔け、内顧の憂ひを無から使め、其の功多し。既にして公致仕し樂堂公後を承く。明治元年正月伏見の役起これ、王師國彊に逼る。翁藩士と與に歸順し、遂に主家の祀を存するを得るに亦與りて力有り。裕恭公立つ。翁侍讀と為り中小姓組頭に遷る。幾ばくも無くして病み、職を辞す。後に松原八幡社祠官と為り、傍ら准を下して教授す。家塾に名づけて觀海講堂と曰ふ。遠近來たり學ぶ者甚だ衆し。二十一年少教正に補せられ、尋いで神職取締り等諸職を兼ぬ。

翁、人と為り眉目俊秀、外謙讓にして内厳正なり。諸職を歷任して鞠躬尽瘁、公のみにて私を忘る。家人に對しては賓客の如く、門人を遇するに朋友の如し。身に奉するに節儉にして貧窮を賑恤す。松原に居ること凡そ二十年、其の徳を敬慕し來たり訪ぬる者、日に夕に踵を接す。翁、毎に嘔を吐き之を迎ふ。人称して播磨聖人と為すと云ふ。

三十一年五月六日病歿。文政五年閏正月二十日生れしより距つること七十八年。鄉人哀悼すること考妣を喪ひしが如く、鄉葬の礼を用ひ姫路景福寺の先塋の次に窓る。詩文稿若干巻有り。其の他雜著甚だ多く皆家に藏せり。

翁始め荒木氏を娶り二男一女を生むも皆先に歿す。繼室西松氏、子無く亦先に歿す。長男亨に遺女有り、乃ち内山仲次の男茂理を養ひ、之に配して以て家を嗣ぐ。翁の歿するや、旧藩主酒井伯之を悼み賄金若干円を賜ふ。蓋し異數なり。銘して曰く

学に勉め徳を養ひ、職を奉じて身を忘る。人に接して謙讓、己を脩むるに格勤、

その行ひや 篤正、其の言や和温、弟子是れ式り、風俗醇に帰す。君子人か君子人なり。

明治三十六年五月

正五位勲五等南摩綱紀撰并びに書 時に年八十有一

養孫 龜山茂理 之を建つ

訓注

軽儻に流る。軽はずみで怠けやすく成り勝ち。

謹懇 慎み深くすなお。

危坐 正座。形を改めて座すこと。

啓沃 己が所信を主君に述べてその考えに影響を及ぼすこと。

較著 頗著と同じ。目立つて良くなること。

致仕 職を辞すること。辞任。

王師國彊に迫る——朝廷方の軍が国境に押し寄せる。

帷を下して教授す。師となつて子弟を教えた。

(昔、師匠がとばり越しに弟子に教えたことから)

鞠躬尽瘁 全力を尽くすこと。

賓客 大切なえらいお客様。

身に奉するに……自分は質素儉約して、困窮した人々に施した。

踵を接す——後から後から次々と続く。

毎に哺を吐き……中國、周の時代の宰相たつた周公旦という人が、髪を洗つている最中に訪ねて来た人があれば、いったん髪を洗うのを止めてその人に出会い、食事中に訪ねて来る人が有れば、その度ごとに食事を中止して迎え、そうまでして、政治を輔佐してくれる賢人の訪れを待つたといふ故事(※一浴に三たび髪を握り、一飯に三たび哺を吐く)から。

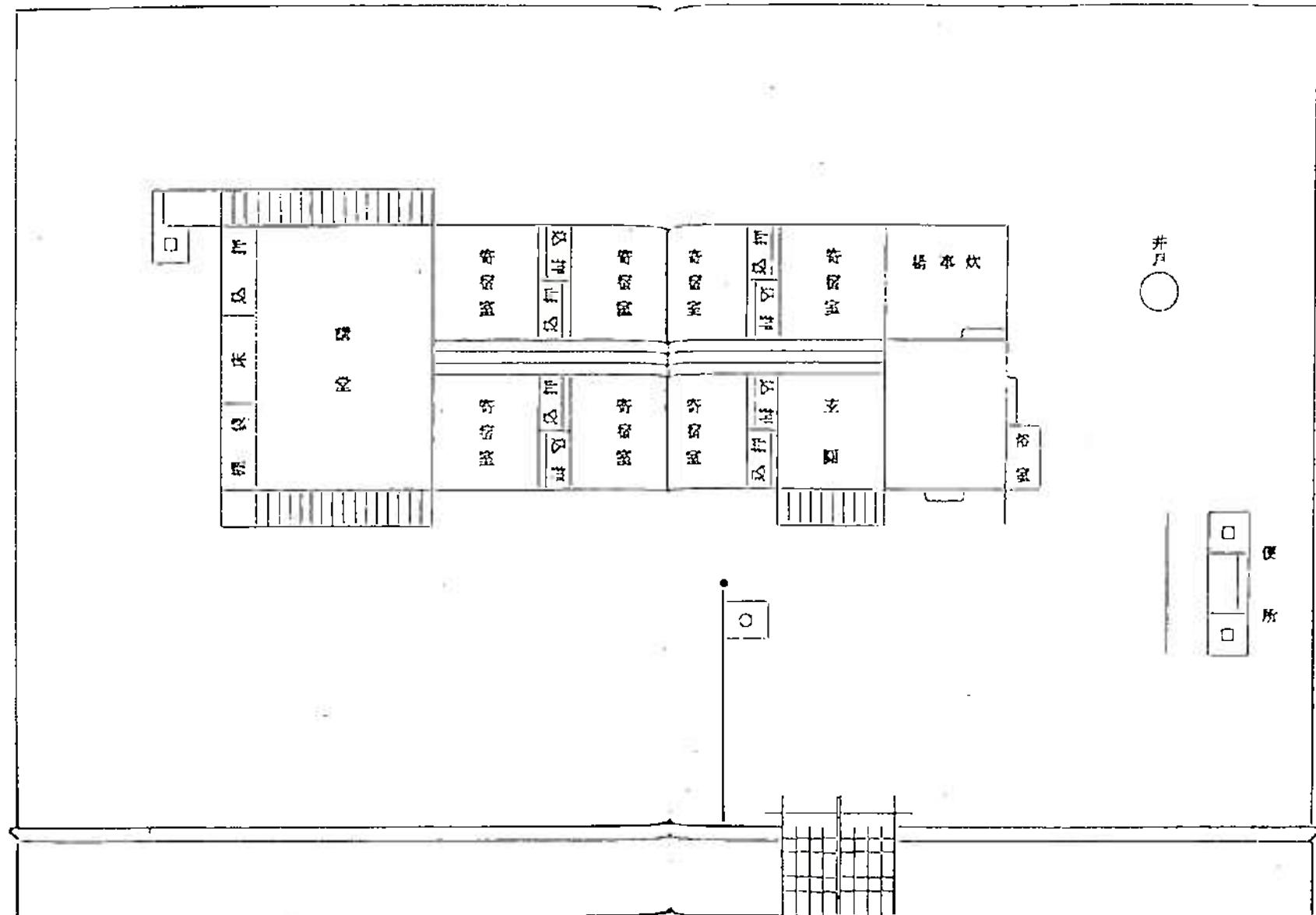
哺 食物 考妣 亡父亡母。 賄金 香典。
異数 異例。 式 のつとる。 醇 醇朴・純朴。

君子人か君子人なり。

——君子人(学徳ともに優れた立派な人)と云うべき人でしょうか。
まさにその通り、この人こそ眞の君子人と云うべき人である。

觀海講堂關係

觀 海 講 堂 路 圖



觀海謹堂印人錄

觀海謹堂印人錄

觀海謹堂印人錄

其銀海謹堂

其銀海謹堂

其銀海謹堂

夜華宋姓名以清

夜華宋姓名以清

夜華宋姓名以清

走三月八日完

走三月八日完

走三月八日完



八九〇 三三〇年

庚寅十二月太

火輪體

金音海

大鑄

金音海

火輪體

金音海

火輪體

金音海

大鑄

金音海

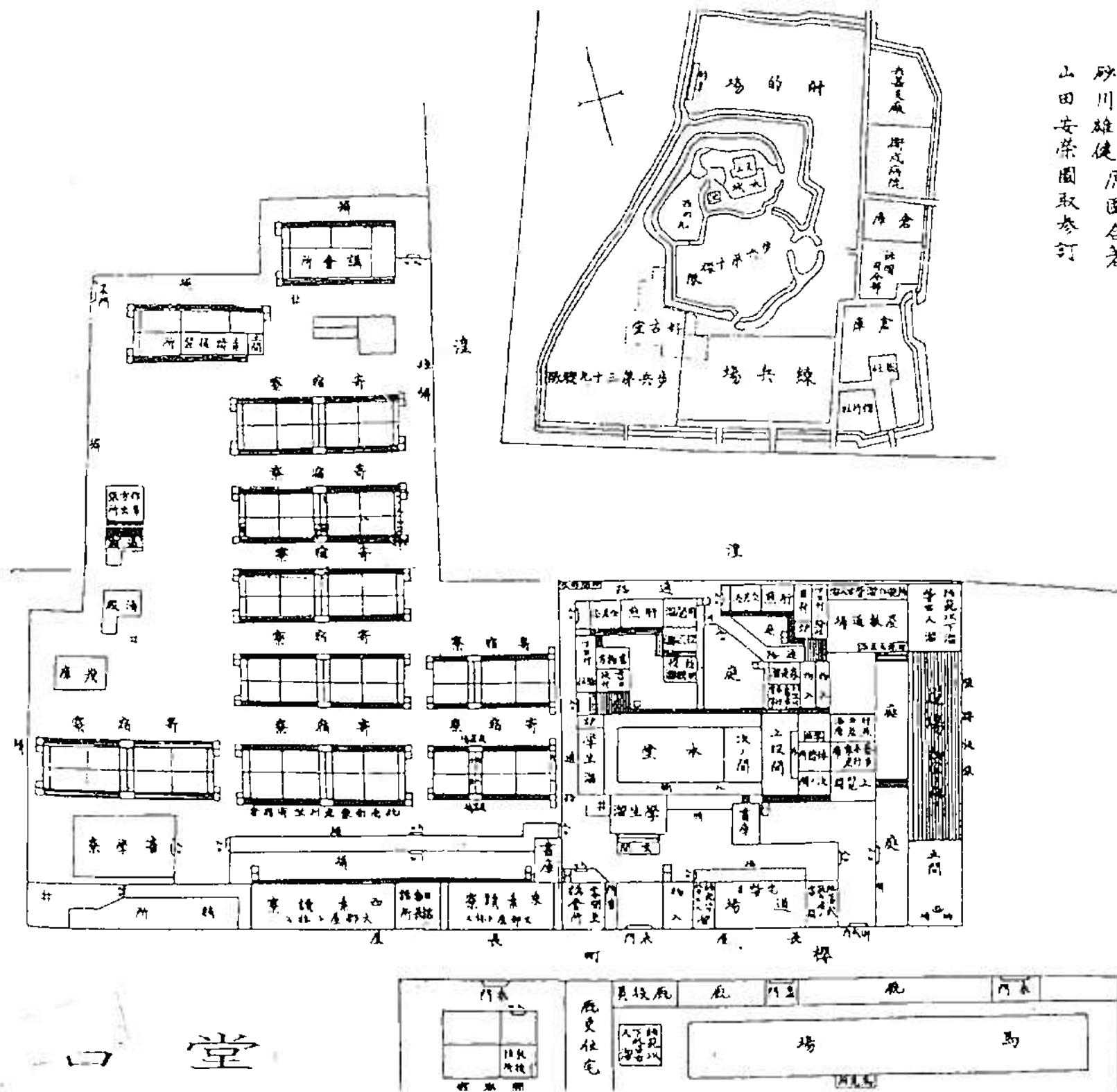
火輪體

金音海

藩校·好古堂關係

好古堂之圖

荒島八尋 原國合著
砂川雄健 取参訂
山田安榮圖



好古堂主教授師

伊藤	蘭齋	名仲導、前橋以來教授安永二年侍講
那波	魯堂	名師會、通稱主膳、一時教授
高濱	季文	通稱周輔、天明七年八月教授
石野	橘園	名懋天明年中教授
高濱	樂齋	通稱省輔、文化十四年七月教授
堤	公愷	通稱鴻佐、文政十二年五月教授、仁壽山校兼勤
齊藤	守澄	通稱幾之進、文政年中教授
根岸	根處	通稱行藏、天保十二年教授
角田	楮園	通稱心藏、嘉永二年教授
秋元	安民	通稱正一郎、嘉永年中國學寮教授
渡邊	劣齋	通稱名璋、嘉永四年書學寮教授
菅野	白華	名潔、通稱狷介、嘉永年中教授、文久三年副督學、慶應元年督學兼勤
松平	棣山	名惇典、通稱孫三郎、嘉永年中督學
秋元	潤宇	通稱三郎兵衛、安政初年教授
多田	菊屏	通稱順平、安政初年教授
龜山	節宇	名美和、通稱敬佐、安政三年六月朔日教授、後文久三年十一月五日 大日付兼勤、後侍講
春山	弟彥	通稱欽次郎、文久三年七月國學寮教授
田島	藍水	通稱廉介、慶應年中教授
羽田省一郎		
伊奈	平八	
五十嵐清之介		
上月	豊蔭	
庭山	武正	
合田	麗澤	
近藤	抑齋	
篠崎庄之助		
宇津木寛居		
小屋	寄武	

姫路藩校

好 古 堂

堂主

門人錄

節士・魚山・天和

輯

安政六年 巳未冬十一月十三日入門

柳合隼之助厄介

大島惣右衛門厄介

二三歳

發延元年 庚申正月十二日入門

柳合隼之助厄介

松島神之丞

十五歳

發延元年 庚申正月十二日入門

坂井銀之助

秋元力吾

十六歳

發延元年 庚申正月十二日入門

小島悅右衛門勇

秋元正一郎世惣

十七歳

發延元年 庚申正月十二日入門

中澤佐一郎三男

秋元成太夫世惣

十八歳

發延元年 庚申正月十二日入門

宇津久一郎弟

秋元正一郎世惣

十九歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大橋寛太郎世惣

秋元成太郎世惣

二十歳

發延元年 庚申正月十二日入門

松崎斧弥世惣

秋元成太郎世惣

二十一歳

發延元年 庚申正月十二日入門

米澤一左衛門孫

秋元成太郎世惣

二十二歳

發延元年 庚申正月十二日入門

餘大念兵衛孫

秋元成太郎世惣

二十三歳

發延元年 庚申正月十二日入門

長澤平右衛門孫

秋元成太郎世惣

二十四歳

發延元年 庚申正月十二日入門

前田益弥

秋元成太郎世惣

二十五歳

發延元年 庚申正月十二日入門

米澤榮三郎

秋元成太郎世惣

二十六歳

發延元年 庚申正月十二日入門

半津木盛三郎

秋元成太郎世惣

二十七歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大橋康之丞

秋元成太郎世惣

二十八歳

發延元年 庚申正月十二日入門

松崎成太郎

秋元成太郎世惣

二十九歳

發延元年 庚申正月十二日入門

沼田久次郎

秋元成太郎世惣

三十歳

發延元年 庚申正月十二日入門

鈴木新太郎

秋元成太郎世惣

三十一歳

發延元年 庚申正月十二日入門

前田益弥

秋元成太郎世惣

三十二歳

發延元年 庚申正月十二日入門

米澤榮三郎

秋元成太郎世惣

三十三歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大橋康之丞

秋元成太郎世惣

三十四歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大田彦左衛門

秋元成太郎世惣

三十五歳

發延元年 庚申正月十二日入門

高橋忠之丞

秋元成太郎世惣

三十六歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大田彦左衛門

秋元成太郎世惣

三十七歳

發延元年 庚申正月十二日入門

高橋忠之丞

秋元成太郎世惣

三十八歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大田彦左衛門

秋元成太郎世惣

三十九歳

發延元年 庚申正月十二日入門

高橋忠之丞

秋元成太郎世惣

四十歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大谷貞八郎

秋元成太郎世惣

四十一歳

發延元年 庚申正月十二日入門

荒木柱一郎

秋元成太郎世惣

四十二歳

發延元年 庚申正月十二日入門

多賀九郎

秋元成太郎世惣

四十三歳

發延元年 庚申正月十二日入門

境野大四郎

秋元成太郎世惣

四十四歳

發延元年 庚申正月十二日入門

本多平馬

秋元成太郎世惣

四十五歳

發延元年 庚申正月十二日入門

本多禮一

秋元成太郎世惣

四十六歳

發延元年 庚申正月十二日入門

高橋久次

秋元成太郎世惣

四十七歳

發延元年 庚申正月十二日入門

大谷貞三郎

秋元成太郎世惣

四十八歳

發延元年 庚申正月十二日入門

本多豊松

秋元成太郎世惣

四十九歳

發延元年 庚申正月十二日入門

本多慶之佐

秋元成太郎世惣

五十歳

發延元年 庚申正月十二日入門

高橋義之助

秋元成太郎世惣

五十一歳

發延元年 庚申正月十二日入門

高橋義之助

秋元成太郎世惣

五十二歳

好 古 堂

家老河合寸翁創立。仁寿山校關係
半民半官校

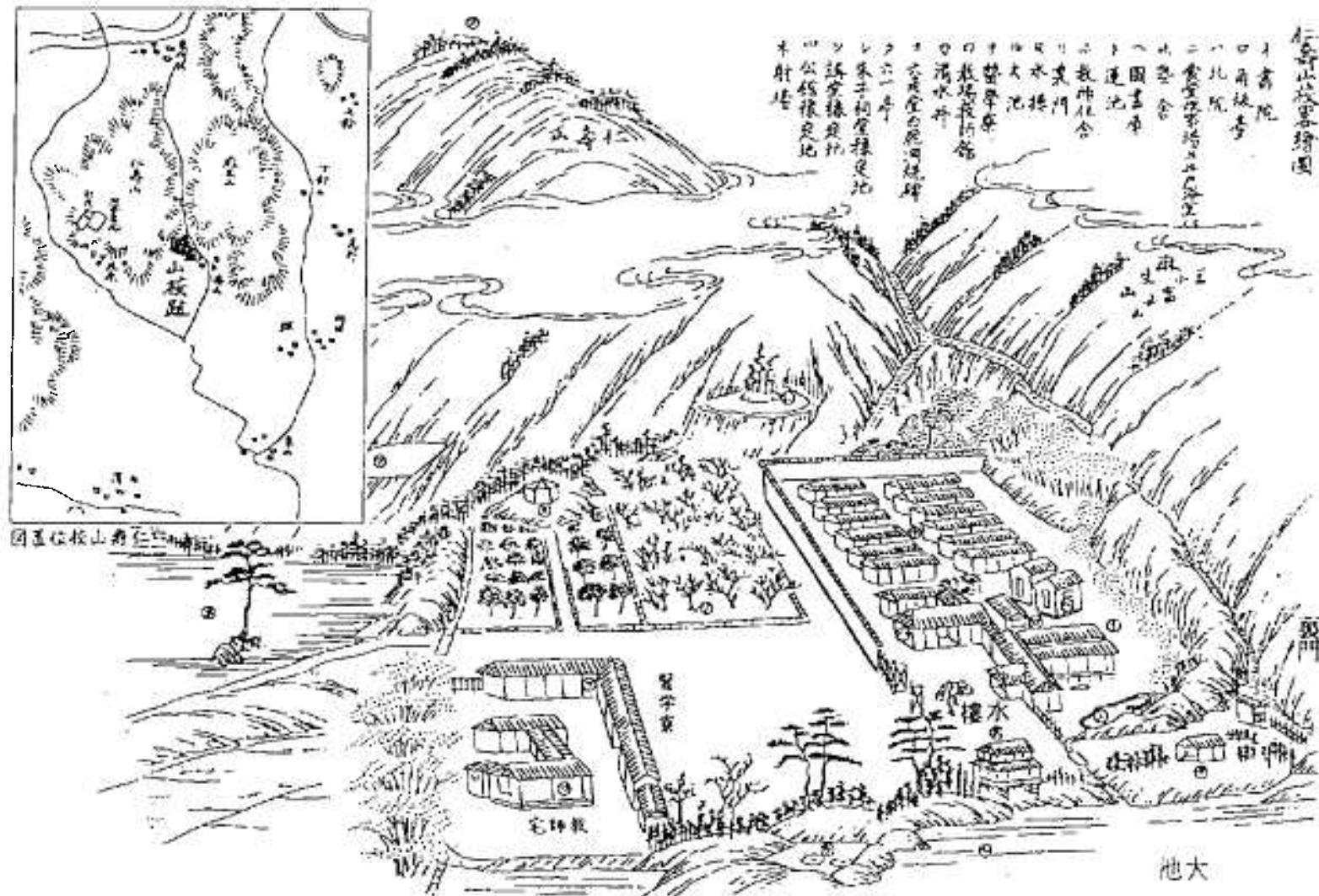
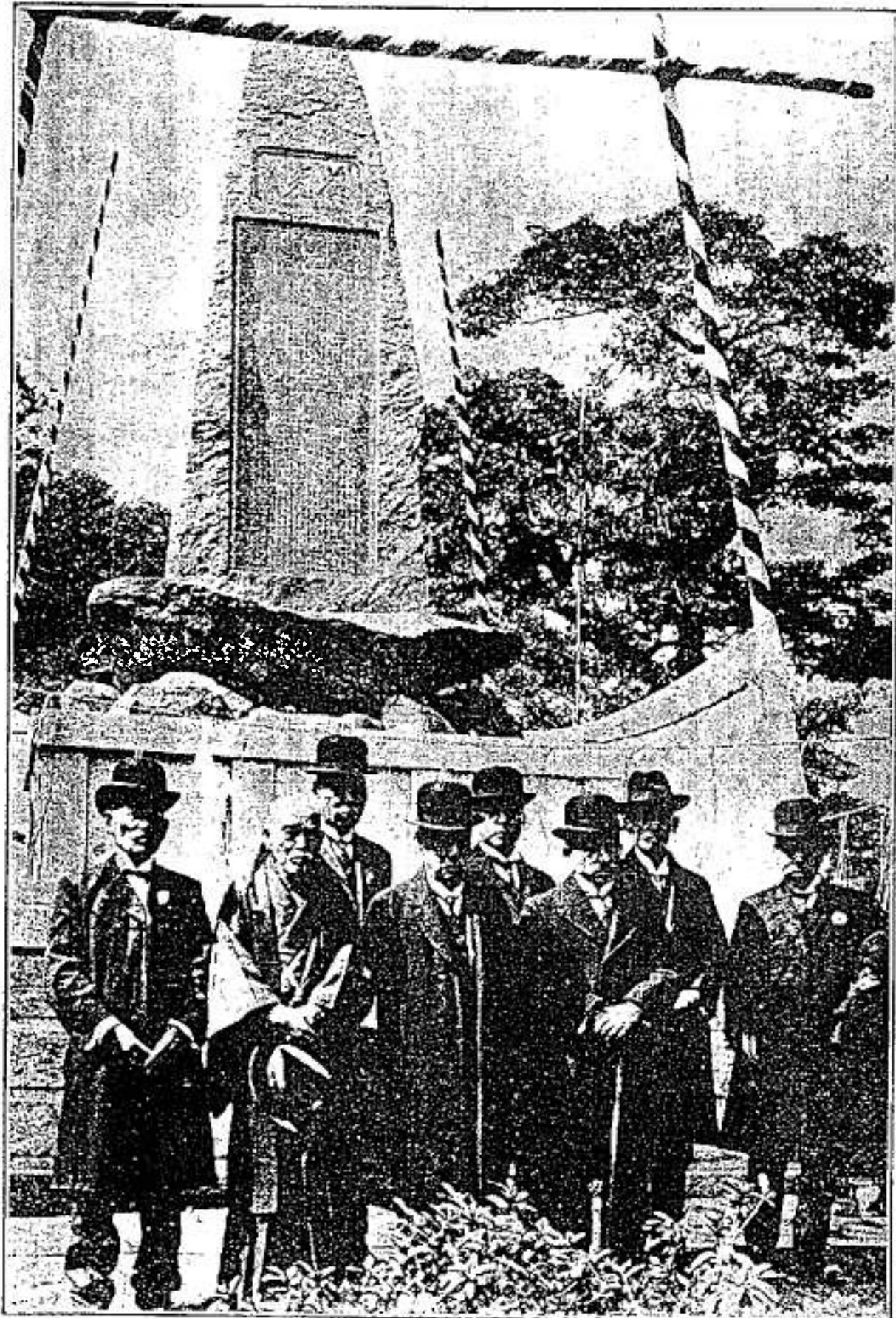


図1 仁寿山校略絵図（下田 天香・明治四十三年）

舊路藩大夫河合道臣之肖像



仁寿山校



寸翁大翁夫頌頌碑

校山仁寿

向テ右ヨリ 榴會計係 西村東京委員 酒井伯爵 藤岡理事官 武井男爵 杉山市長
河合外吉氏 矢内史談會長

仁壽山學問所紀念碑

仁壽山校址碑

伯爵酒井忠正撰

姫路藩大夫河合寸翁余が先世忠道忠實二君ノ信任ヲ受ケ藩政釐革ノ衝ニ膺リ功績甚ダ多シニ君之ヲ褒シ文政二年祿ヲ増シ且ツ特ニ城ノ東南阿保坂元奥山北原兼田諸村ノ山林ヲ賜ヒテ燕息ノ處ト爲サシム仁壽山是ナリ寸翁以爲ヘラク教化ヲ興シ人材ヲ得ルハ今日ノ急務トス此ヲ以テ恩ニ報ユベキナリト乃チ私財ヲ捐テ山南ノ一區ヲトシテ校舎ヲ創設ス書院塾舍書庫教場教師館醫學寮等ノ諸堂宇六一亭六角堂白鹿洞規碑等アリ又朱子祠堂公館等ノ地ヲ豫定セリ其學制ハ大學頭林述齋ノ指導ヲ仰キ近藤抑齋菅野松鳩ヲ舉グテ督學トナシ汎ク藩内外ノ子弟ヲ收容ス猪飼敬所賴山陽摩島松南等ノ碩儒來リ講ジ育英ノ業日ニ進ム仁壽山校ノ名四方ニ聞エテ藩學好古堂ト相駢馳セリ天保十二年寸翁逝キテ後校運漸ク衰ヘ藏書什器ノ類率々好古堂ニ移管セラレ山校遂ニ廢ス今ヤ當年ノ校舍泉石皆湮滅シテ復観ル可カラズ獨市川ノ清流瑩然トシテ山麓ヲ繞リ白鷺ノ城樓分明雲際ニ聳ユルアルノミ今茲舊藩士民ノ有志相謀リ寸翁頌徳ノ碑ヲ姫山公園ニ建テ又此碑ヲ山校ノ遺址ニ置キ以テ其勵業ヲ不朽ニ傳フト云フ

仁壽山賛祭趣意書

昌本義郷土の大先覺河合大夫は故つて故立せられた仁壽山發の名は、夙に明治維新文化も其名著れ、たゞ此地播州子弟の育成に貢せられたのみならず又深く天下の志士學者を迎へて當時に於ける國士の道場となり、其學風は轟轟にして家國天下に貢献する所又渺茫とせかつたに拘はらず、今や夏霜移つて其の跡聲々荒涼と歸して居る事は、實に心有る士の齊一く遺憾に堪へない所である。

由來、人材の輩出は其の師友の豪傑曰く、英雄哲人曰對する私淑徒衆、幼時より育まれ來つた郷土の山川風物の感化とは極る所が多ひ。然より姫路を中心とする我播州人に曰、古來播州に人物無一との甚き輕平なる先入観念があり、従つて漫刺たるべく少青年時代にも嘗て威氣氣力なく、折角の遠村も長さるに從つて凡化へ去かの姿へ變遷とは謂ひ得也。

茲に於て、郷土を愛し郷土を興することを其の心得の一として精進すべき事を誓へる不肖等名教會同人は、此誠士なる弊風の打開を期して、仁壽山發の學風を詔び、その精神的復興を志し、恰も天政四年河合大夫が藩政整理の効力致り君公の優厚を交ひて青原山の一戸に仁壽山發を開いたる三月十四日（舊曆正月二十五日）及至三月十一日をト一、仁壽山發祭之禮一同發主理從四位守翁河合尊之助宗元大夫の靈を祭す、郷土後輩の至誠を致ナニ共に戒諭する郷土子弟の將來に些の寄與する所あるを得たば欣然之れに過ぐトと爲し、別然仁壽山發祭計刻音を擧げて先づかゝる聲を高す所以である。茲くは郷土先輩各位、不肖等同人の志を諒せられ御道援を賜らむことを。

明和九年二月下浣

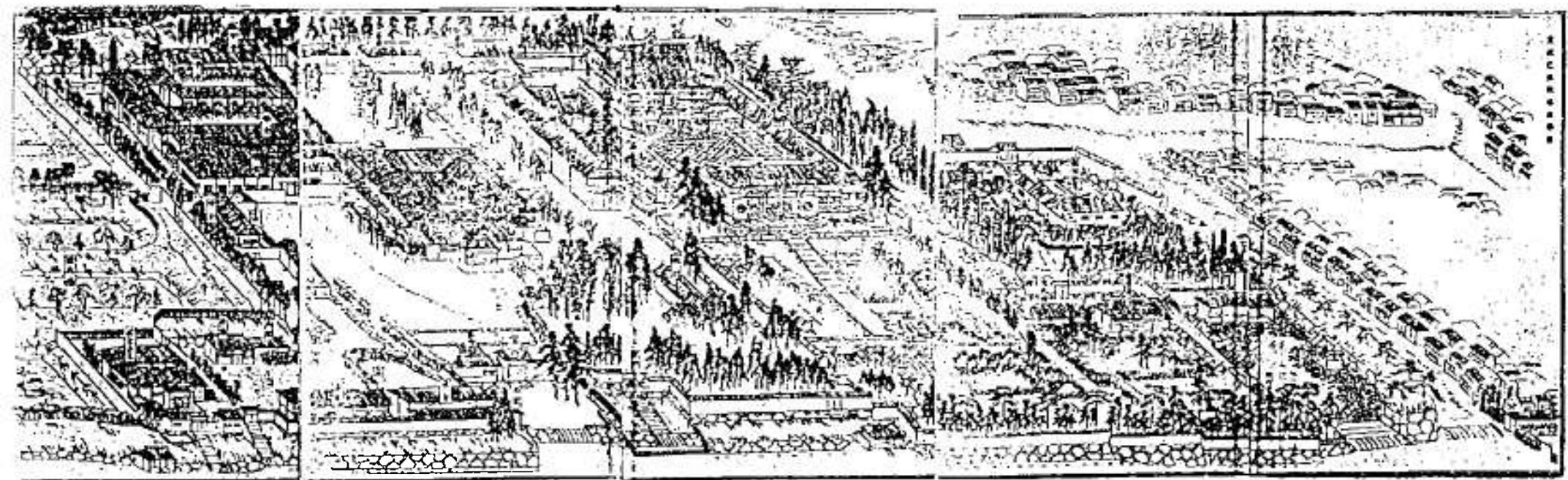
姫路名教會

一、鯨鹿郡木引村奥山字奥谷

一、烟 七支ノ致若四歩
二、難地 四支ノ致若四歩
合計 一所一爻又放二人歩

（參、田七八坪）

幕府官学、昌平坂學問所關係 (通稱・昌平校)



幕府官学昌平校の絵図（寛政十一年改築当時のもの）

寛政十一年十月、幕府は大成殿を大規模に新築した。また前年より幕府直轄の昌平坂学問所を開いた。この建物の用材は堅実、構造は精緻で、久しく江戸の傑観であったが、大正十二年の大震火災で入徳門・水庭のみを残して全焼した。しかし今の殿宇の様式は、すべてこの当時のものに拘る。

佐藤一齋肖像

門人渡邊崇山筆

河田烈氏藏



一毫仰付惟之精可也一毫
不以高貴能致毫莫其仰
矣不以高貴也事行如火所
立外者神之走神少至而
才古之尊名川靈物而生辰
萬物而生此皆造乎中庸應于
常無自而生也能則生此則
古有齊化也正此之謂也
惟得能成其事乎
甲子夏夏工時之

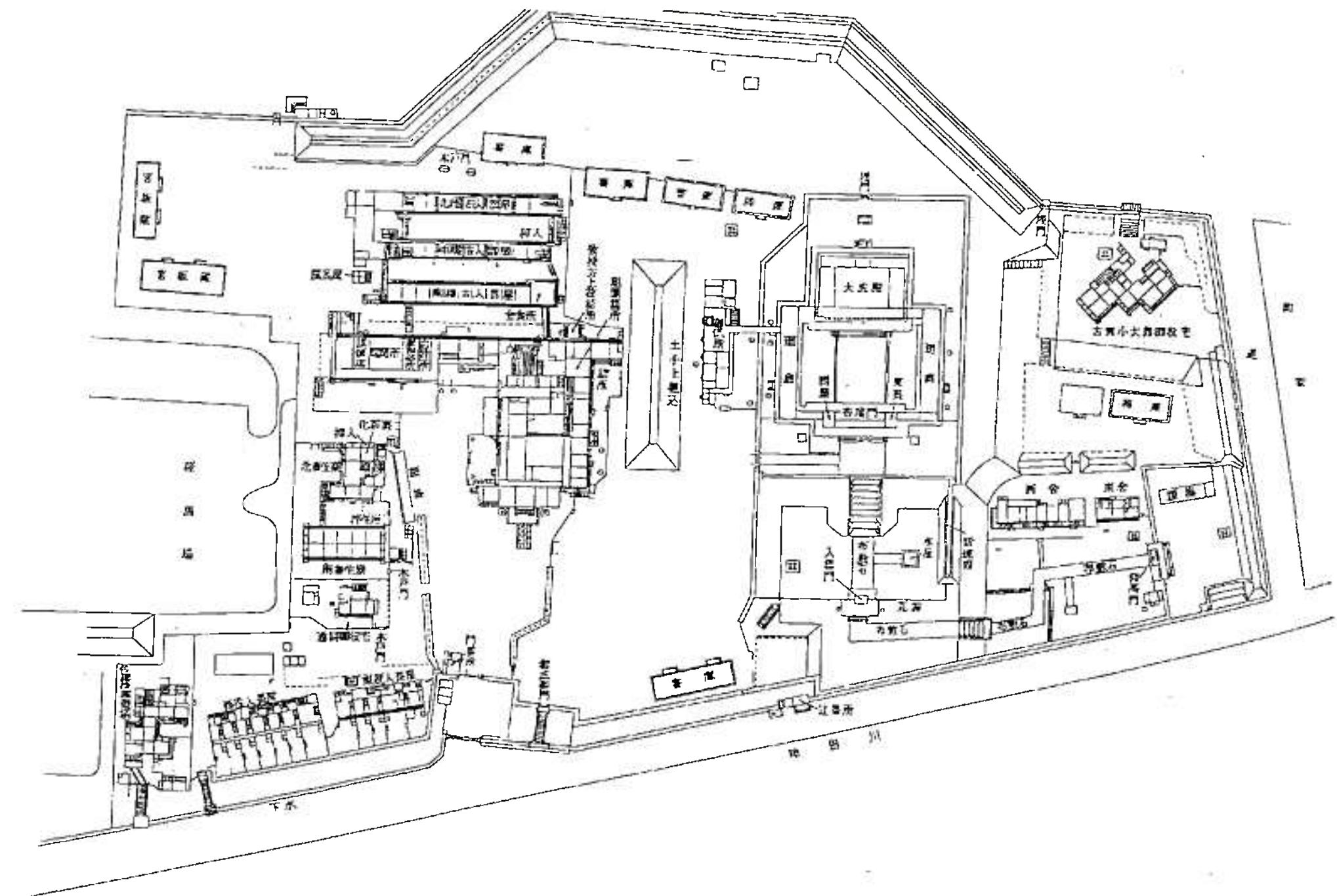
平坂學問所



東京教育博物館所藏

聖堂講釋の園

所問学坂平昌



32

昌平校

昌平坂学問所絵図

嘉永四年五月現在の書生寮の圖

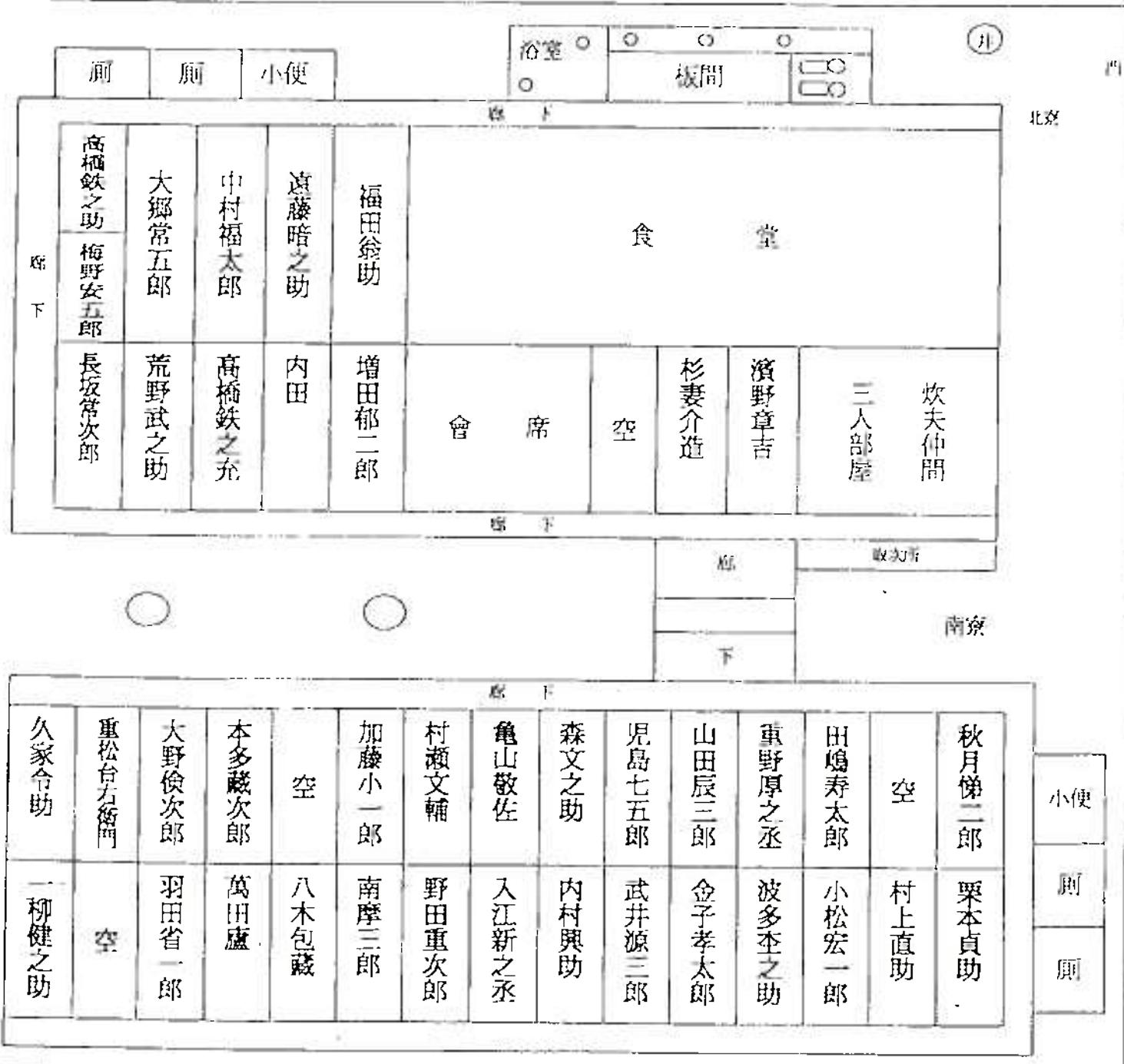
聖玉堂主書生寮之圖

南寮八畳宜北寮六畳

尤金日堂ノ東寮八畳也

四十四人ヲ以満察ト定ム

今四十人入寮ノ書生有



批評諸家輯錄

卷二

批評諸家例以號稱之號不詳則以字稱之字亦不明則始稱名而其人多係節宇先生江戸昌平坂

宅諸友

高 雨舟

本名慶子字子政

一

○ 菅野白華

菅原氏江字白華

一

○ 重野成齋

重野安得字子成齋號文之齋又号之正

○ 高橋飯山

高橋元治字人有古

○ 原仲寧

原仲寧字仲寧本戶人以不居實學古之道

○ 河鹿門

河原千代字知玄

一

上田貞

水本樹堂

一

三浦雷堂

三浦定風字雷堂

都築漁齋

都築良一

○ 安積艮齋

安積代喜字二木

生形虛堂

生形道人

○ 南摩羽峯

南摩代會字人氏

森深谷

森千中

相良鷹里

相良宣夏人平介

○ 土屋鳳洲

土屋鳳洲

八木東原

八木東原

小松元伯

小松元伯

宮崎誠

宮崎誠

○ 金子三石

金子三石

○ 多田菊屏

多田菊屏

木原櫻里

木原櫻里

○ 繢古堂

繢古堂

○ 松本奎堂

松本奎堂

犬塚貞一

犬塚貞一

○ 岡崎億山

岡崎億山

○ 山田筑浦

山田筑浦

津田遲菴

津田遲菴

○ 松平樺山

松平樺山

○ 多田菊屏

多田菊屏

○ 増田松塙

增田松塙

○ 三島中洲

三島中洲

大塚貞一

大塚貞一

大塚貞一

大塚貞一

一

○

三島中洲

三島中洲

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

第三十七表　昭和四年五月現在の書生室在留者氏名

設の必要と効果とに向かって基を進めた。

學問所傳主法音へ極は、聖
體、聖家への教育第一にて仕
り候には、僧々の如く既而
・浪人等は盡て置かざる心

獨に成^共、^一、^{獨立法營}、前は陪臣・役人とも御扶持され下され候、當時は全く尊志の者ども自分まかなひにて入交仕り候へば、まかり在り候處所ばかりは向本衙取扱て下され度を事やに存し奉り候。左候へは御本人御教育の益被相及び、陪臣・役人どもにても志とれるもの、御教育の恩恩恵も御座候へば、御教育成大の御恩深もこれあり、然るべからず學^学に奉つ候。

この建議はなだらかにとよむだらかに
書生寮の公設となり。その上、
寄宿寮のために備えてあつた

一三〇人扶持の資本資糧の内
の、三〇人扶持をさいて書生
寮の費用にふり向けられた。⁽⁵⁾

察が実院に発足したのはとの建議があつてからまもないところであつたであろう。おそらく

く初代の会場であるたかと想
われる大閑平泉（おおとき）。

る長い歴遊の路程に出かける
ためだ。會長辞任の風いを出
したとき、宣和二年十二月二日

ことであつた。しごみる
と、此時にはすでに公使の
ただ御家人の教育場というて

書生寮が活動を開始してからものと思われる。何にしてもこの寮のできなことで昌平坂学問所は、とどまらないで、諸君の後秀を集めて漢学の教育を構成する最高學府の実をそなえたのであった。

五代 姫路藩主 酒井公・關係



酒井 邦



酒井 忠邦



酒井 忠博



酒井 忠頼

酒井 美意子さん(さかい・みいこ)は評論家、ハクビ総合学院名譽教授(名誉院長)5年後2時55分、心不全のため東京都新宿区若葉1の14の自宅で死去、73歳。東京都出身。葬儀・告別式は9日午後2時から新宿区南元町19の2、千日谷会堂で。喪主前田利為侯爵の長女として生まれる。戦後、エチケットなどの評論家となり、加賀百万石の家柄を継ぐ前田利為侯爵の長女として生まれる。戦後、エチケットなどの評論家となり、「ある族の昭和史」がベストセラーになるなど、文筆活動で活躍された。



市川 河



市川 渡し



安左 本 多 平 雨



六角木石父
陸軍大臣伊萬



長崎陸軍支那事務局長



井上松香



武井守正



写真4 近藤 薫

◎藩校、好古堂時代雲平の門人関係

明治時代になり大立身出世した人々

◎米国艦隊、ペリー来航した時、浦賀
へ出陣した兵士達の氏名

嘉永六年六月（一八五三）亞米利加艦隊ペリー来航に對し
姫路藩兵、浦賀へ出陣した時の士卒の氏名

服坪横大山大市立大小宮志吉佐狩中大堀杉峯大樋瀧奥春須梅牧粟森神鈴小丸
部内山平岸谷川川島糸沢賀村久野村河江山村塚口澤山山田澤野飯田谷木林島
惧甚大左 閔金官 岩間鐘原 捨宗 万鉄欽 七錠原浪 半丑
豊次一三衛權七之七官武源次 吉三熊波應惣次三岩五四次啓 五之平右銀三羊三
次郎郎門次郎助郎助助次郎 五郎蔵蔵助次郎郎蔵郎郎蔵三助助次郎郎郎
助門

龜秋植芳宇坂神宮重山山海井有三田中堀松諸小小武手岡堤角牛荒北小渡水高
井元松賀野井戸澤田脇川老上馬浦中嶋口本葛野暮藤島本 田込木爪林部野橋
出平左久造酒莊惣大鑑沢弘又 三三釗次次乙平元金寛孝格 望皇又弥
席源一一右鹿太兵左次之牧之三多之左一郎郎一之之右四之八弥友太五五七仲
者吉郎郎衛衛平夫蔵郎助助進郎膳助左衛門郎助助郎進助郎助郎作弥郎郎郎蔵
門

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
烏岡上大荒清伊松米金大本永木渡勒本今伊前矢小中吉小安伊岡多金金秋細
崎田山木水藤田澤原河庄根村部使河使多村舟島内泉里澤幡井藤田賀井澤間野
九左亥三安鑄助原亀傳久河已城惣念市九釣安節貫貫五郎半太
鉄郎右太十貢九左安三次乃兵万兵源次太三左久賀五右衛門之八次
之承夫郎郎衛衛次弥郎承衛右衛門次次郎助郎郎助郎郎助夫衛
（二〇二人）



第一次ペリー来航の時の詩文
第二次ペリー来航の時の詩文
平時の浦賀 貝拾いの詩

いづれも亀山雲平の記録である。

咏夷舶至浦賀事

維時癸丑六月丙子。浦港羽檄疾於矢。言是北亞墨利加。巨艦入港。恣虎視。迺知話聖東。鴉巢慾無窮。鎮臺將士目皆裂。巨砲長劍氣吐虹。廟謨有恩不輒擊。腥羶書達成將幕。赤髮碧瞳三百奴。火槍成隊躍上陸。七侯受命扼要地。士怒如火。奮不睡。潮激暗礁響砰訇。皓月在天明旗幟。書生何唯事筆鋒。自有韜略蟠心胸。鞍馬告具卒食蓐。起橫大槊睨飛烽。

甲寅春墨夷重抵浦賀

安政元年

墨夷果來矣。浦賀之馬頭。黑鬼白奴數百隊。聞說彼理又其酋。廟謨從容曾不動。炮臺幾處扼咽喉。令嚴將士夜肅々。更番偵敵上戍樓。春月在天旗幟明。羣氛不及鐵砲洲。

浦賀襍詩二首

天末鯨濤外。帆痕落日間。地形連武野。湖勢接房山。劍戟晴相閃。旆旌春正閑。雄藩兵衛肅。長此服夷蠻。望斷三崎浦。水天鶴影迷潮聲。搖島嶼。烽火隔虹蜺。戍衛磨兵刃。團營逐馬蹄。行人歸不得。決皆立長堤。

題洲崎撈蛤圖

浦賀爲江戶要衝之地。而洲崎則其彎入之處。亦不可以不豫備也。但以其潮汐盈縮之便。沙土深淺之宜。春夏之交。兒女喧沓。以爲遊戲之場。撈蛤之地。或曰宜築土豚以避夷礮也。宜結木棚以碍夷艦也。余則謂兒女之遊戲。必有嚴於土豚木棚者焉。夫爲臣子者。一日浴太平之澤。則報一日之恩。矧浴數百歲太平之澤。以得今日之安者乎。一旦緩急必有報之者。傳云庶女告天。而飛霜下擊。今之

亀山雲平の略年譜

年号	西暦	事蹟	筋主	参考事項
文政 5年	1822	1月20日龜山百之の次男として姫路に生る	忠實	文政4年に龜山校を開く
天保 3年	1832	姫路高校好古堂に入り落葉角田心穀に学ぶ		9月頃山陽53才にて没す
10年	1839	4月16日當分の内週日方、句読手伝い仰せ付けられる。 (7月5日上の本役を仰せ付けられる)	忠實	天保6年4月27日忠實隠居する。
11年	1840	4月15日學問出精につき御褒美として替代、金200匹を賜う		
12年	1841	書物預役都務を仰せ付けられる		6月14日河合才翁75才にて没す
13年	1842	4月5日學問出精につき2人二士扶持の手荷を賜う。 8月好古亮肝煎を仰せ付けられる。		仁寿高校を廃し寄宿舎を大手前好古堂に移す
14年	1843	2月26日指南手伝を仰せ付けられる。察肝煎、書物預役は前の通り。 閏9月30日兄剛毅病により没す。子なきにより落命により龜山家を嗣ぐ。 焼火番を仰せ付けられる。12月23日書物役を免ぜられる。		
弘化 元年	1844		忠實	3月好古堂落成式4月3日開講の典に忠實自らこれに臨む。 天保誓を実施先學10月10日37才江戸において卒す
3年	1846	9月22日察肝煎免ぜられる		
嘉永 元年	1848			5月27日忠實70才にて卒す
3年	1850	9月22日時耕校定説合せ仰せ付けられる。 12月24日江戸昌平坂學問所寄宿舎仰せ付けられる。 同日時耕校定説合骨折につき金百疋を賜う		
4年	1851	正月18日江戸昌平坂學問所へ入門。佐藤捨藏(一痴)に師事する		
6年	1853	2月26日江戸昌平坂學問所寄宿生柴持文桂仰せ付けられる。 6月8日アメリカ船漁賀へ渡来につき藩公御供、中小姓仰せつけられる。 12月1日伊達近習席講學問御相待説仰せ付けられる。	忠頭	忠實8月10日25才江戸において卒す
安政 元年	1854	5月1日御宿間賄仰せ付け拂拂の前、浴衣三尺帶手拭、外に喜光院様より酒肴料を賜う。7月17日校定時拂一部下賜される。 12月21日御内御用にて御慰斗目一つ及び金5両賜う		
2年	1855	3月23日藩公初の入部につき御供仰せ付けられ、5月18日江戸発駕。陣道中既次番相勤める。 5月御膳道中出精につき金200匹賞賜される。 6月1日好古堂教授仰せ付けられる。 12月28日数年出精相勤めたるにより高増10石下賜される。		10月安政大地震、蘿田東湖50才没す
3年	1856	6月15日參府御供仰せ付けられる。 8月15日姫路を発した。 7月11日江戸在番仰せ付けられる		6月15日藩公好古堂を改革し、條規を定める
4年	1857	4月1日御入部の御供仰せ付けられる。 5月1日當年は人少につき滞在するよう老中より遣せられる。 12月24日御内御用にて羽二重小袖1枚、金2両2分下賜される		5月下田条約結ばれる
5年	1858	7月11日御内御用にて金2万両2分拝領する。		
6年	1859	8月5日三宅土佐様え召され御紙入1つ拝領する。 9月11日江戸御発駕、御供にて10月2日姫路に帰る12月23日御内御用にて御肩衣袴洋服		
萬延 元年	1860	4月2日御手當として金15両下賜	忠續	3月桜田門外の変・忠頭10月14日25才江戸において卒す
文久 元年	1861	4月9日顯徳院様御遺物として長袴肩衣馬乗袴拝領する。 11月5日大目付仰せ付けられる。教授は前の通り		
元治 元年	1864	正月11日高増20石下賜される。 3月8日御用向有るによって出京仰せ付けられる。 4月7日姫路に帰る。 8月修徳院様御遺物御紋付黒袖金300疋下賜される。 11月29日御内意御用向有るによって出府仰せ付けられる		姫路姫子の歿
寛應 3年	1867	3月16日急遽出府仰せ付けられる。御用済の上5月11日姫路に帰る	忠祐	忠續2月3日隠居す。關亭と号す。 10月大政奉還
明治 元年	1868	正月12日跡前草薙懇親の儀仰せ付けられ相間む同14日池田留門守御人數出張中、懇親の掛仰せ付けられる。 2月25日直之助様御上京御供仰せ付けられる。 在京中介介役ならびに本業務を仰せ付けられる。 3月26日姫路に帰る。 4月1日直之助様學問御吉話仰せ付けられる。 同7日隣交掛仰せ付けられる。 同8日直之助様介添役業務仰せ付けられる。	忠邦	改元9月18日、1月17日姫路城 12月10日昌平・開成2校ならびに医学校に教授をおくる。 忠邦5月20日隠居す。楽堂と号す 甲子の歿 102人 戊辰の歿 70人

		6月14日絵図門御番仰せ付けられる。 7月8日中小姓組頭御取次業務を仰せ付けられる。 11月24日中小姓組頭施役仰せ出される。組席はこれまでの通り	
2年	1869	3月続社御門御番方仰せ付けられる。 10月1日名を豊平と改める	忠誠 6月18日新潟藩知事に任せられる
3年	1870	9月8日学問御相手申し付けられる。 12月学問御相手勤めるについて御紋付御白物御手より祥准す	
4年	1871	正月28日頃より隠居	7月14日茨城県の詔書出る
6年	1873	7月23日松原八幡神社官仰せ付けられる。 8月17日御内閣御歎により地誌提要収録へ申し付けられる。 同年10月3日完了により解雇となる。 12月18日大教正有馬頼成より教導職9級試補申し付けられる	
11年	1878	11月28日神道事務局より播磨國神道事務分局副長担任仰せ付けられる。	
14年	1881	8月13日内務省より権大講義に補せられる。	
17年	1884	9月17日1等優試験合格証を兵庫県皇典講究分所より下附される。 10月1日親海講堂新築落成	
18年	1885	9月20日神道官長利葉正邦より大講義に補せられる	
19年	1886	10月16日節度郡河官掌副取締事し付けられる。 同19日坂少教正に補せられる	
20年	1887	6月16日神道近路分局内局顧問申し付けられる。 12月26日少教正に補せられる	
21年	1888	11月23日京都府河官掌取締担任を申し付けられる	
23年	1890	8月12日兵庫県皇典講究分所受持委員申し付けられる	
31年	1898	1月1日神職給理局姫路市御庭部分局長申し付けられる。 同11日姫路神社及び射楯兵主神社々司に褒挙せられる。 5月6日病氣にて親海講堂において没す。 姫路櫻松山永福寺先塚の傍に葬る	

H.19.7.12 お開



亀山雲平の履歴書

履歴書

- 一文政五年壬午閏正月二十日姫路ニ生ル
一天保十年四月十六日當分ノ内偶日方句讀手傳仰付ラル
一同年七月五日右本役仰付ラル
正ヲ賜フ
一同十二年十月二十二日書物預役兼勤仰付ラル
一同十三年四月五日學問出精ニ付御手當トシテ一人扶持ヲ賜フ
一同年八月好古堂察肝煎仰付ラル
一同十四年二月二十六日指南手傳仰付ラル察肝煎書物預役故ノ
如シ
一同年四九月晦日願ノ通り兄源十郎剛毅養子仰付ラル
一同年十一月二十一日剛毅跡式減少アルベキノ處學問出精ニ付
特別ノ恩召ヲ以テ百四十石ヲ賜ヒ御焼火之間御番入仰付ラル
一同年十二月十六日指南手傳勤役中書物料トシテ年金五兩ヲ賜
フ
一同年十二月二十三日書物預役ヲ免セラル
一同年九月二十二日察肝煎免セラル
一嘉永三年九月二十二日詩緝校定讀合仰付ラル
一同年十二月二十四日江戸昌平坂學問所寄宿仰付ラレ四年正月
十八日御儒者佐藤捨藏様へ入門書生寮へ入ル
一同年十二月二十四日詩緝校定讀合骨折ニ付金百疋ヲ賜フ
一同六年二月二十六日昌平坂御學問所書生寮詩文掛仰付ラル
一同年六月八日亞米利加船浦賀ヘ渡來ニ付君公御供御中小姓代
仰付ラル右ニ付恩召ヲ以テ御手當金壹兩ヲ賜フ
一同年十二月朔日御近習席御學問御相手江戸在番仰付ラレ昌平
坂御學問所退學仰付ラル
一安政元年正月十七日御讀書ノ節御紙入ツ御手自ヨリ拜領
一同年二月九日源氏的御相手之節御牛切御書簡袋御烟草入拜領
院様ヨリ御手拭酒肴料ヲ賜フ

同年同月四日御内御用ニテ黒羽二重御紋服拜領

同年同月十三日御餅搗之節獻上物ニ付金百疋ヲ賜フ

同年七月十七日校定詩緝一部下賜

同年十二月二十一日御内御用ニテ御熨斗目一ツ及ヒ金五兩ヲ

安政二年正月二日思召ヲ以テ下緒美濃紙紋柄一帖拜領

同年三月二十八日御歸城ニ付御供仰付ラレ御道中御次番相勤ム

同年三月某日御讀書ノ節御筆洗一ツ拜領

同年四月二十五日御内御用ニテ袴一つ帷子一ツ拜領

同年五月御歸道中出精ニ付金二百疋賞賜

同年八月十七日御手自唐金天祿水入一ツ拜領

同年十二月十五日御内御用ニテ御紋服拜領

同年同月十八日御内御用ニテ金二百疋拜領

同年同月二十八日數年出精相勤候ニ付高增十石下賜

同三年正月十九日從來勝手向不如意ニ付御手當トシテ金三十
七兩三分二朱下賜

同年二月十三日御内御用ニテ伊賀袴地一反下賜

同年五月十日御内御用ニテ帷子襦袴拜領

同年六月朔日教授兼勤仰付ラル

同年三月三日御手自ヨリ御肩衣一つ拜領

同月十五日御參府御供仰付ラル

同年七月十一日江戸在番仰付ラル

同月十二日御内御用ニテ紋付袴金二百疋下賜

同年十二月二十六日御内御用ニテ御下着一枚金二百疋拜領

同四年四月朔日御歸城御供仰付ラル

同年五月四日御内御用ニテ御馬乘袴帷子拜領

同年七月十三日當年ハ御人少ニ付御暇不被爲在御藩府ニ相成
在番長々ニ付在番中一ヶ年金五疋ヲ、下賜

同五年十二月二十四日御内御用ニテ羽二重小袖壹枚金二兩二分
下賜

同五年五月二日御内御用ニテ袴一つ紬小袖一つ拜領

一 同年七月十一日御内御用ニテ金二兩二分拜領
一同六年五月二日御内御用ニテ小袴一つ拜領
一同年八月五日三宅土佐様へ召サセラレ御紙入一つ拜領
一同年九月十一日御發駕御供ニテ江戸出立十月二日姫路ニ歸ル
一同年十二月二十三日御内御用ニテ御肩衣袴拜領
一 萬延元年四月二日御手當トシテ金拾五兩下賜
一同月九日御内御用ニテ馬乘袴金三百疋拜領
一 文久元年四月九日 顯徳院様御遺物トシテ長袴肩衣馬乘袴拜
領
一 同年十一月五日大目付役仰付ラレ 教授如故
一 元治元年正月十一日高増貳拾石下賜
一同年三月八日御用向有之出京仰付ラル
其年四月二十七日歸城
一同年八月某日修猷院様御遺物御紋付黒綿金三百疋下賜
一同年十一月二十九日御内憲御用向有之出府仰付ラレ翌二年正
月十四日御用濟ニ付歸城
一同月二十七日江戸表ニ於テ肩衣袴拜領
一 延應三年三月十六日急速出府仰付ラレ 御用濟ノ上五月十一日
歸城
一同四年戊辰正月十二日備前軍使應接之儀仰付ラレ以後引續應
援相勧
一同年正月十四日池田備前守様御人數出張中掛仰付ラル
一同年二月十五日御用向有之急達京都へ立寄出府仰付ラル
一同月二十九日直之助様御上京御供仰付ラル御在京中介添役并
ニ本メ兼勤仰付ラル
其年三月二十六日歸城
一同年四月朔日直之助様介添役兼勤仰付ラル
一同年四月七日隣交掛仰付ラル
一同月二十日御紋付麻野羽織拜領
一同年六月十四日繪圖門御番仰付ラル

一 同年七月八日御中小姓組頭御取次兼跡仰付ラル

一 同年十一月二十四日御中小姓組頭廢役仰出サル但席是迄之通
明治二年三月總社門御番方仰付ラル

一 同年十月朔日名ヲ雲平ト改ム

一 同三年九月八日御學問御相手申付ラル

一 同年十二月御學問御相手相勤候ニ付酸漿クヅシ御紋付御召物
一枚御手自ヨリ拜領

一 同四年正月二十八日願ニヨリ隱居

一 同六年七月二十三日松原八幡神社祠官被仰付

一 同年八月十七日飾磨縣御雇ヲ以テ地誌提要取調申付ラル其年
十月三日取調濟解雇

一 同年十二月十八日大教正有馬賴威ヨリ教導職九級試補申付ラ
ル
一 同年六月二日教部省ヨリ申講義ニ兼補セラル

一 同十一年十一月二十八日神道事務局ヨリ播磨國神道事務分局
副長擔任申付ラル

一 同十四年八月十三日内務省ヨリ權大講義ニ補セラル

一 同十七年九月十七日一等假試驗合格證ヲ兵庫縣皇典講究分所
ヨリ下附セラル

一 同年十月一日觀海講堂新築落成

一 同十八年九月二十日神道管長稻葉正邦ヨリ大講義ニ補セラル

一 同十九年十月十六日飾東郡祠官掌副取締申付ラル

一 同年十月十九日權少教正ニ補セラル

一 同二十年六月十六日神道姫路分局内局顧問申付ラル

一 同二十年十二月二十六日少教正ニ補セラル

一 同二十一年十一月二十三日飾東郡祠官掌取締擔任申付ラル

一 同二十三年八月十二日兵庫縣皇典講究分所受持委員申付ラル

一 同三十一年一月一日神職監理局姫路市飾磨郡分局長申付ラル

一 同年一月十一日姫路神社及射楯兵主神社々司兼務ヲ免セラル

一 同三十二年四月二十六日射楯兵主神社々司兼務ヲ免セラル

一 同三十二年五月六日病氣ニテ觀海講堂ニ於テ歿ス其十一日姫
路瑞松山先塋ノ次ニ葬ル

亀山雲平明治時代 の役職関係

龜山雲平役職名

一、松原八幡神社祠官	明治六、七
一、教導職九級試補	明治六、十二
一、中講義申付らる	明治七、六
一、播磨國神道分局長	明治十一、十一
一、權大講義申付らる	明治十四、八
一、兵庫縣皇典講究分所一等仮試験合格証	明治十七、九
一、大講義申付らる	明治十八、九
一、權少教正に補せらる	明治十九、十
一、飾東郡祠官掌副取締	明治十九、九
一、神道姫路分局内局顧問となる	明治二十、六
一、少教正に補せらる	明治二十一、十一
一、姫路市飾磨郡社司社掌取締	明治二十二、十二
一、兵庫縣皇典講究分所受持委員となる	明治二十三、八
一、姫路市飾東西郡社司社掌取締	明治二十四、十二
一、神堂教導職尋常検定委員に命ず	明治三十一、十二
一、姫路市飾磨郡神職監理分局長	明治三十一、一
一、射楯兵主神社社司 兼務	明治三十一、一
一、姫路神社社司 兼務	明治三十一、一

亀山雲平の公職印
並びに落穀印關係

縣社
幡社
之印
社掌
松原

縣社
神社
龜山
雲平

縣社
社社
山雲
至

縣社
社社
山雲
至

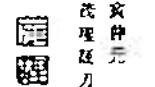
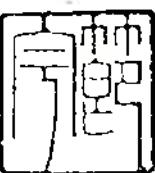
縣社
社社
山雲
至

縣社
磨郡
神職
理令局
長平織

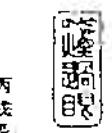
姫路市飾東
郡社司社
掌盤理分每

觀海講堂

印譜



皮文仲元
茂理延元



東坡



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

西岳長夏偶訪朱石山房

西岳長夏偶訪朱石山房

西岳長夏偶訪朱石山房

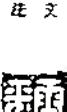
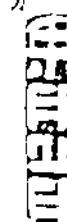
西岳長夏偶訪朱石山房

西岳長夏偶訪朱石山房

西岳長夏偶訪朱石山房

明治甲子年夏
山先生書於大正

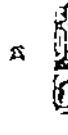
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

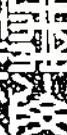
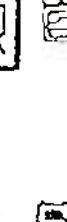
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

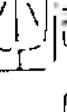
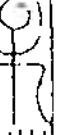
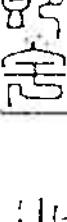
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

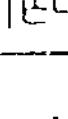
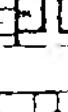
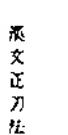
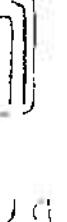
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

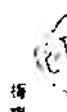
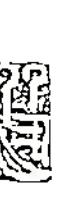
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

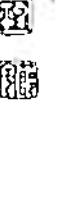
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

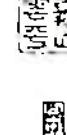
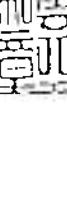
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

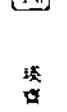
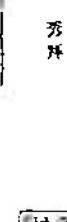
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

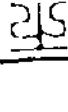
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

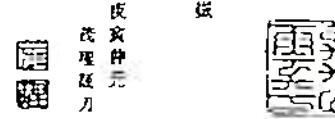
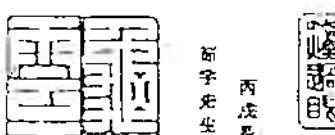
尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

尊親
木感鑒賞刀



皮文仲元
茂理延元

龜山先生

印譜

丙午之夏作於白雲山房

龜山先生

皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

龜山先生

皮文仲元
茂理延元

丙午之夏作於白雲山房

龜山先生

印譜

亀山雲平の出版物
(著書)関係

